名探偵
シャーロック・ホームズ
Sherlock Holmes

恐怖の谷

THE VALLEY OF FEAR

コナン・ドイル 作
小林司・東山あかね 訳
猫野クロ 絵

恐怖の谷

名探偵シャーロック・ホームズ

恐怖の谷

目次

第一部　バールストンの悲劇 …… 5

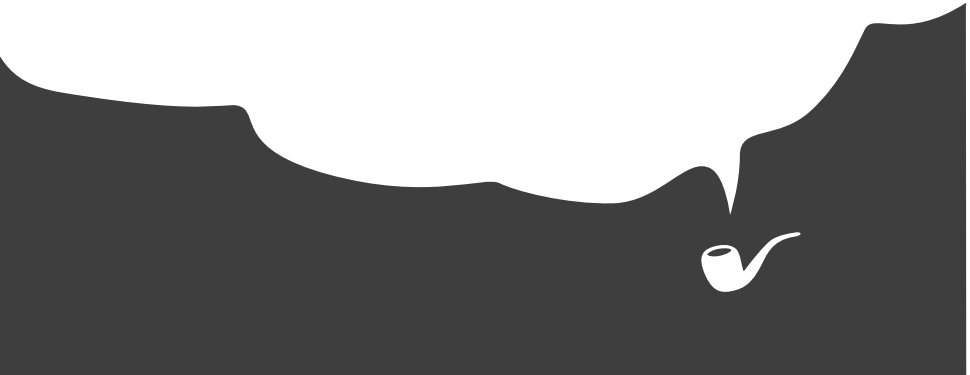
第一章　みごとにとけた暗号 …… 7
第二章　モリアーティ教授の正体 …… 17
第三章　惨殺死体が発見される …… 28
第四章　犯人は外部の者か？ …… 42
第五章　目撃者の証言 …… 61
第六章　ホームズの調査 …… 81
第七章　堀の中から出てきたもの …… 101

第二部　スコウラーズ …… 121

第一章　シカゴからやってきた男 …… 123
第二章　マギンティ支団長 …… 133
第三章　ヴァーミッサ三四一支団 …… 152
第四章　恐怖の谷の日び …… 172
第五章　送りこまれた殺し屋 …… 184
第六章　危機がおとずれる …… 196
第七章　しかけられたわな …… 207
エピローグ　モリアーティの犯罪 …… 217

物語の中に出てくることばについて …… 222
ホームズをもっと楽しく読むために …… 230
●この本の作品について …… 230
●十九世紀のアメリカについて …… 239

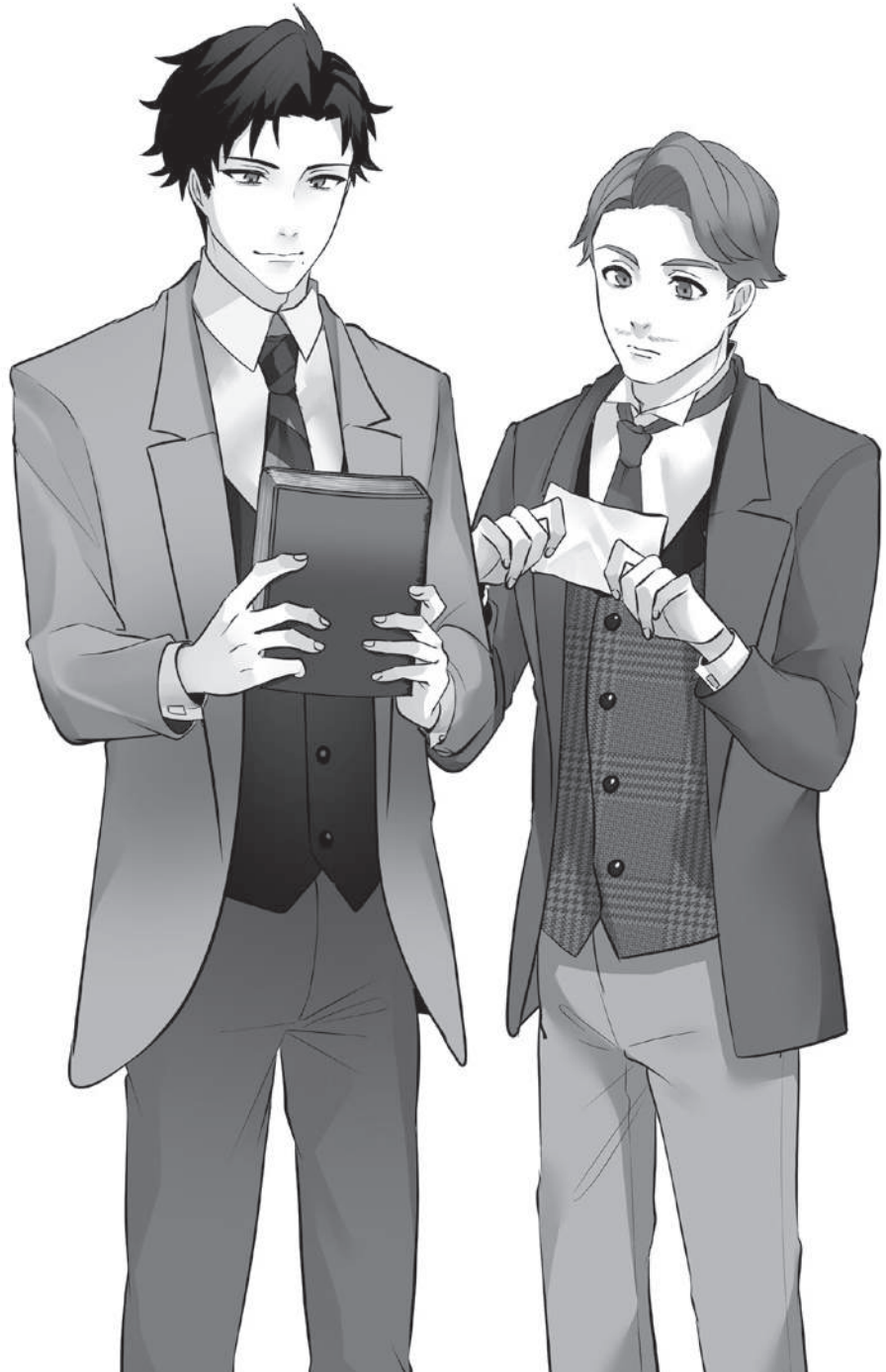
第一部　バールストンの悲劇（ひげき）



恐怖の谷
THE VALLEY OF FEAR（原題訳「恐怖の谷」）

第一章　みごとにとけた暗号

「こう考えてみたいんだが」
と、わたしがいうと、
「考えることなら、だれでもするよ」
と、ホームズはいった。
「きみはときどき、ちょっと気にさわるようなことをいうね」
ホームズは、それには答えず、朝食に手もつけないで、封筒からとりだした紙きれを、注意ぶかくしらべていた。
「ポーロックが書いたものだ。あの男の字は、まだ二度しか見たことはないが、重要なことにちがいない」
「ポーロックとは、何者だい？」
「この名前は、本名ではない。かれは、ある大物にかかわっている。きみは



ぼくから、モリアーティ教授[*1]の話を、聞いたことがあったかい？」
「あの有名な、科学的犯罪者のことかな」
「だが、モリアーティを、犯罪者なんていおうものなら、侮辱罪でうったえられるよ。すべての悪事の総元締で、暗黒界の支配者――国家の運命さえ、思いのままにできる。それがこの男さ。
　しかも世間からは、なんのうたがいもうけず、かげで糸をあやつっている。きみのいったひとことを、裁判にかけて、人格を傷つけた慰謝料として、きみから年金を一年分まきあげることだってできる。かれは、『小惑星の力学』という本の著者で、純粋数学の最高水準をいっているんだ。ぼくはいつかきっと、かれにうち勝とうと思っている」
「その日が見たいものだね。ところで、いまはポーロックのことを話していたのだけれど……」
「そうだったね。ポーロックという男は、つながれた鎖の環のひとつだ。重要なポストからは、はなれたところについている男で、たいした環ではない」

「鎖全体の強さは、いちばん弱いところと同じだということだね」
「そう、そのとおり。遠回しに、ぼくがときおり送ってやった、十ポンド[*2]紙幣のききめがあって、一、二度情報を知らせてくれたことがある。暗号の解読さえできれば、この情報も、事件を未然にふせぐのに役立つだろうけれどね」
　ホームズは、皿の上にその紙きれをおいて、しわをのばした。

534 C_2 13 127 36 31 4 17 21 41
ダグラス 109 293 5 37 バールストン
26 バールストン 9 127 171

「かぎのない暗号文では、こまるね」
「そう、この場合は、まったくこまる」
「なぜ、『この場合は』というのかい？」

「すぐにとける暗号文も、いくらでもあるからさ。これは、なにかの本の、あるページに出ていることばを、さしていることはたしかだ。けれども、どの本のどのページかわからなければ、お手あげだ」
「でも『ダグラス』とか、『バールストン』というのは、どういうわけなのだろう？」
「そのふたつの単語が、問題にしている本のページには、のっていなかったからさ」
「なぜ、本について書かなかったのかなあ」
「ワトスン、ふつう、暗号のかぎと本文を、同封するようなことはしないだろうね。べつべつに送っておけば、なんのきけんもない。そろそろ、二度めの郵便が、とどくころだ。それに、この暗号のかぎになる書名が、書いてあるはずだよ」
　それから二、三分もたたないうちに、少年給仕のビリーが、手紙をとどけに入ってきた。

二度めの郵便
　ホームズの時代の郵便制度は、完備されていて、ロンドン市内で出した郵便物は、その日のうちに配達された。また一日数回、郵便の配達があった。

少年給仕
　住みこみではたらき、主人のちょっとした用をたす少年。ボーイ。

「同じ筆跡だ。やや、これはがっかりだ！　……『シャーロック・ホームズさま。わたしは手をひこうと思います。かれは、わたしをうたがっています。暗号文のかぎをお送りするつもりで、この封筒のあて名を書きおわったところへ、かれがやってきたのです。封筒をかくすことはできましたが、かれはうたがいの目で見ていました。どうか、暗号文はもやしてください――フレッド・ポーロック』」
　しばらくのあいだ、ホームズはしかめづらをしていた。
「裏切るとなれば、相手の目が、せめているように感じられたのだろうね」
「相手というのは、モリアーティ教授のことかい？」
「そう。『かれ』といえば、それで十分」
「そのかれが、なにをやるのかい？」
「それが大問題なのさ。手紙の筆跡と、封筒の筆跡をくらべてみると、封筒ははっきりしているのに、手紙のほうは、ほとんど読みとれない」
「なぜ、それでも手紙を出したのだろう？」